

河井道子における国際性と信仰（その2）

一 色 義 子

1. はじめに

さきに、「河井道子の国際性とその信仰(その1)」(恵泉女学園大学紀要第三号(1991年度)と題して、河井道子(1877-1953)の国際性を論じた。その際、国際という視点から彼女の生涯を三期に分類し、第一期、国際性開眼期(1877-1904)、第二期、国際性実行期(1904-1926)、そして、第三期、国際性の教育実現期(1926-1953)とした。その際、主に第二期に河井が大半の巻頭言を記したYWCAの機関誌「明治の女子」と「女子青年界」から河井の文章を集めた「河井道子文集」*を中心に河井の国際性を探った。当論文ではその続きである、第三期、国際性の教育実現期(1926-1953)を取り上げる。

この時期は、1926年、河井が日本キリスト教女子青年会(YWCA)の総幹事を辞職し、外遊し、「私の学校」¹⁾のヴィジョンをふくらませながら、その目標を形成し、1929年4月、恵泉女学園を創設、開校し、爾来24年間1953年その生を全うするまで、学園長であった年限に相当する。その意味で、教育期間である学校教育の中で、如何に国際を教育として扱ったか、が課題となる。

しかも、その時期は前の二期と比較しても、その社会背景が、著しく変化した。内外に明らかに日本が軍国主義の国家として、つきすすみ、アジアへ侵略戦争を行い、やがて、太平洋戦争、日米戦争にたちいたり、また世界が第二次世界大戦に激動した日々を経て、敗戦、平和の時代にいたっ

た。河井が最も、嫌った戦争*が続き、国際平和を思う河井がそれと相反する状態におかれ、内面において、外部に対して両用に戦わなければならなかった厳しい時期が大半を占める。

一夜にして、終戦を境に、平和、民主主義、「新しい日本」への再生、という日本の社会が直面した価値の激変。そして、アメリカをはじめとする戦後社会のさまざまな国際関係。それはまた別の意味で、国際人、河井道子のめざましい活動が記録される時となった。恵泉女学園における国際教育の面でも一時期をなした。

今回は特に、個人がどうであれ、地球範囲で世界を動かし、世界の人々がさらされた戦争中という状態の時期を含むので、そうした、社会背景から分類を試みた。それは河井個人の内面的必然性におかず、あえて、河井が対応しなければならなかった、社会的背景から三期に分類する。即ち、

- (1) 戦中前期－恵泉女学園創立期（1926－1939年）
- (2) 戦中後期－学校教育への国家規制期（1940－1945年）
- (3) 戦後期－民主主義謳歌期（1945－1953年）

この時期に河井の著書は、“Japanese Women Speak”（1933）²⁾（1部 久布白落実），“My Latern”³⁾（1939）－(1)の期，と，“Sliding Doors”⁴⁾（1951）(3)の期の2冊と、ほとんど毎月巻頭文を記した，“恵泉”誌（月刊，ただし戦中戦後の暫時を除く）（1932年11月第1巻第1号－1952年9，10月合併号の巻頭文及び，同年11月，1953年1，2月，の（3ヶ月合併号）が公にされたものである。

なお，メモ程度の記録，手紙，講義の聴講者のノート等が参照可能である。

本稿では上記の三分類の内の，(1)戦中前期及び，(2)戦中後期を扱う。

「戦中」というこの期は，河井が恵泉誌第1巻第1号において，「国家非常時」⁵⁾との認識をもったことでも明らかな国際認識に発している。世間で

はまだ戦中認識は薄かった。けれども、河井はすでに多くを感じとっていた。この時すでに、日本は中国の各地に戦闘。国内では戦闘肯定の気運が漂い、「満州」事変、満州国建国、5.15事件、その他の暗殺、2.26事件とファシズムの台頭。その中には、河井に理解のあった井上準之介⁶⁾もあり、さらに、日本の国際連盟脱退はかつて、その事務次長であった新渡戸稲造を恩師と思う河井にとって、暗い時代を個人的にも感じしめるものがあった。河井にとって、「戦中前期」といえよう。

この期は彼女をとりまく社会、ことに、日本の社会が、彼女の使命観、理想と相反する流れにあって、その中で、河井が国際理解と平和教育をいかに進めたか、そこに河井ならではの独自な特徴はなんであったか。限られた資料の中から少しでも明らかにしたいと思われる。

2. (1) 戦中前期—恵泉女学園創立期。(1926—1939)

a, 社会背景

この期を戦中前期とした主たる理由は、河井はかなり早い時期に戦争の響きを感じとっており、その悲惨と痛みをうれいている。その意味で河井にとってはこの区分は唐突ではない。しかし、日本の一般の社会は国外で戦争へ向かいつつ、国内の生活は搾取による欠乏回避の豊かさで、戦中の自覚は少なかった。したがって、軍国化をたどりながら、表面ではかなりの自由があった。

同時に、河井にとっては、恵泉女学園が創立から10年を数える一期間であり、9名ではじめた、私塾のような学園が高等女学校としての、普通部各学年2組編成で10学級、高等部として、文科、家事科、留学生部を擁す学園として、財団法人となり、教師も校舎も敷地も、一応ととのい、卒業生も出し、その進学率も、東京の歴史ある女子の学園におとらぬ成績をあげてきた。かつ、社会的には次第に時の緊張を帯びて来たとは言え、まだ、教育に自由がゆるされ、河井の理想がほとんどさまたげなしに行われた。

それ故、この期は私学の教育の内実に至り、国が立ち入ってきた戦中後期とは異なり、戦中前期として区切ってみる事が出来よう。

河井は、世田谷移転後満2年目に創刊した、恵泉誌の上記第1巻第1号に、学園教育について記している。国際をふくめて、河井の教育の根源に触れていると思われる。

「私共には何の特徴がありませうかと自問自答して、……聖書の“汝をして人と異ならしむる者は誰ぞ、汝の有てる者に何か受けぬ者あるか もし受けしならば、何ぞ受けぬ如く誇るか”との警句を忘れずして私共の特徴はキリストであり彼に依りて啓示せらるる尊き高き理想へ志して教育の道を辿りつつあるのだと返事するほかは存じません。」⁷⁾

b, 恵泉女学園創立準備。

さきに、1925年の秋、河井は責任をもって、全国YWCA総会を開催し、この大会をとどこおりなくすませた時、決然、辞職の申し出をした。河井道子47才であった。

この1925年という年は、治安維持法が成立。また、河井の牧師で、恩師の一人であった、植村正久が召天。キリスト教婦人矯風会や、女子学院を創立した矢島梶子も召天した。

そして、翌1926年3月3日、河井は日本を後にした。

この段階で河井はまだ、学校をたてようとの確実な計画はもっていなかった。

2日おきに、渡辺百合に手紙を投函し「神、我らを、導き給う」の信仰に生きる試練の日々であった。「キリストが十字架を負いつつなお病める人をいやし、悩む人に慰めを与えようとされたか—わたしたちも、私たち自身が血をながしつつもかたわら他の人の傷をいやさなければなりませんね。」⁸⁾

アメリカにつき、ワシントン、ニューヨークをたずね、次第に「私たちの学校」の建設に夢がふくらんでいった。

「わたしの学校! それはどういう種類であるべきだろう。規定され

ているカリキュラムとともに、実践的な宗教教育を与えるかたわら、国際の勉強をその教育の具体的な教科目とする方法はないものかとわたしは考えた。」⁹⁾

そして、そのことを通して、河井はいままでYWCAという組織体で、女性によって、直接に社会活動をしてきた働きを、教育という場で、別の形、間接的にしかし、積極的にとりくもうとした。その辺りの意図が、次の文にあらわれている。

「わたしの生徒を通してわたしが国際交友のために貢献することはできないだろうか。戦争は、婦人が世界情勢に関心を持つまでは決してやまないであろう。それなら、若い人たちから——それも、少女たちから始めることである。少女たちはただの好奇心から出発して外国の人々や外国のよいところを理解するように導くことができる。」¹⁰⁾

この理由は、河井にとって、次の文に明らかである。

「キリスト教が第一に自己を尊重することを教えるとすれば、第二には、人種や階級に関わりなく他の人を尊敬することを教える。なぜならすべての人類は神の子どもだからである。」¹¹⁾

彼女のアメリカ及び、ヨーロッパの旅は、「人種問題や国際問題を学校でどういう風にとりあっているのだろうか」「第一次大戦以後教育はどのように変わっているだろうか」「『新教育』というのはどういうことなのだろうか」「西洋世界では婦人の地位は現在どうなっているだろうか」¹²⁾等に関心をもって視察することになっていった。

そして、彼女の学校は「今日の世界の中にある一つの小さなかけ目をうずめるにふさわしい学校の建設に役立つだろう」¹³⁾との考えであった。

その「かけ目」とは日本の中に欠けているものである。と同時に河井の着目は移民規制法案を通過させた、アメリカ社会にも共通して言えるとうけとっている。他者にたいしての、「無知というものは常に僻見と誤解をおこす」¹⁴⁾という理解であり、日本の「家庭の婦人方がまじめに熱心に国際問題に興味を持ち、その解決に手を貸すときがくることを夢み」¹⁵⁾「国際の勉強をわたしの未来の学校の特色の一つとしよう」と計画」¹⁶⁾しそれによって、「わたしの生徒たちは、平和と善意が支配する新しい世界秩序を導きいれるように力をかすようになってほしい」¹⁷⁾との願いをあらたにした。

また、

「わたしたち日本人は外国に住むためにしろ、自国で住むためにしろ、他国の文化と文明を理解し、尊重するように日本の婦人を教育すべきである。なぜなら無知と僻見とは手をむすびあったものだからである。」¹⁸⁾

スイスのジュネーヴに滞在し、ドイツが国際連盟に加入した時に居合わせた。その時を回想して、

「その時でさえわたしは連盟の諸国が不安や疑惑や不一致を持つときがくるかもしれないということを漠然と感じた。婦人の上にこそ、世界平和を恒久的なものにするため努力しつづけ計画しつづけ祈りつづけ犠牲をさえも払いつづける責任が課せられていると、わたしは確信させられた。わたしたちの希望は数十年の間には実現しないかも知れない。しかしその責任の重荷は日本も含めてすべての国々の婦人によって分担されなければならない。」¹⁹⁾

この河井の理想と信念が、学校というかたちで、結集していった。それは、12月に大正が終わり、昭和がはじまるという年であった。

1928年のはじめに送られた学園創設の趣意書に、河井は「聖なる唯一の

神を我らの父として仰ぎ、全人類を兄弟姉妹として愛し奉仕する宗教を基礎として国際の親善と世界の平和を目標として奮進し、我教育界に新生面を開くに有ることを確信して疑わない者であります。」と記している。ここに、彼女の国際の基礎としての、キリスト教が明確に出ている。それは、基準を一国の視点にも、数ヵ国の視点にもおくのではなく、また、利益や物質科学文明の振興、進歩発展に焦点をあてるのでもなく、父なる神のもとに、全人類を兄弟姉妹という最も親しい間柄に見、その間に競争するのではなく、愛し、奉仕する、というキリストの模範にならった信仰を基礎とする、「国際」の親善であり、従って、世界平和である。これはたしかに、以後学園で展開される河井の国際教育の根幹であった。

1928年から具体的に恵泉女学園設立の準備がされたが、その時期は金融恐慌につづき、「日本人保護を名目」²⁰⁾に中国出兵、済南を攻撃、占拠した。また、張作りん爆死事件もおこった。内務省警保局保安課の強化と各府県の警察に特別高等課（いわゆる特高）が勅令で公布、更に憲兵隊に思想係が設置された²⁰⁾。

政府による左翼活動に対する弾圧は、国民の知らぬところで、激化し、共産党は合法活動が不可能な状態となり労働組合系は結社を禁じられた。1929年に入ると、世界的不況で国内でも就職率が3割を切る²⁰⁾。

c, 恵泉女学園創立

1929年4月、恵泉女学園創立。以上の時期にかかわらず、設立された。河井の時流に動じない信仰的、預言者的動機をみることが出来る。趣意書にそえられた河井の書簡の中に、「是迄も屢屢有形無形に御深厚なる御同情に浴した私より又更に御援助を仰ぎ候事は、如何にも厚顔の次第に候へ共、此事業の性質上、私一人のものにてはなき心地いたし大胆にも趣意書御一覽の上御助力を賜り度偏に御願申上候。仮令ただ只今御寄付あづかり得ずとも、何卒此学校のため御加禱被下、」²¹⁾と記している。これは河井の常日頃の考えを實によく現している。この事業は神の事業であること、寄付を願いながらも、協力ということは金銭だけでないこと、有形無形の意味、

祈りの力を信じ、且つ今までの協力、祈りへの深い感謝をしていること、が挙げられる。それが、真実であるところに、河井の人となりが見られる。

こうして、創立された学園は彼女の50余年の人生において、神から受けたものを実現する意図に結集されていた。かくて、「恵泉女学園の学科課程には、正規の高等女学校の規定にそくしたものに比べて、『国際』と『園芸』それに「聖書」が加えられた。

1934年9月、財団法人の申請をし、翌年2月認可されたが、その恵泉女学園の中で、「係官には正科として礼拝をまもり、聖書をおしえるということもすでにあったが、それよりも『国際教育』と『園芸』を正科とするということが納得しがたく」説明に苦労したといわれる²²⁾。

創立当初の学科課程に聖書と国際は河井自身が受け持った。また信和会と呼ばなかったが、最初から生徒の自治会のようなものがあった⁵¹⁾。

この事はキリスト教教育である聖書、礼拝とともに、河井の国際観念と深く関連している。

それは正に当時の日本の政治と国際関係、中国を含む地域への侵略開始の反平和、反国際、の時期に当る。と同時に、国民の思想統制に政府が乗り出した時期にも符丁する。河井はそうした時の波を知りつつ、全く独自に理想をかかげて、出発した。

d, 恵泉女学園における河井の国際教育の確立

「国際」の時間。

国際善意デーのプログラム

外国人の訪問、歓迎

バーサー・ブラオン・ランバートの滞在

朝鮮半島、台湾、その他の人々の入学

海外に父母在住の生徒のために寮を置き、教育を受ける機会を作った。

婦人平和協会、平和論文入選

河井の平和使節としての中国訪問

河井の平和使節としてのアメリカ訪問

これらの出来事に学校をあげて協力した。

信和会の発足—生徒の自治活動。—学内のみならず，対外奉仕，献金の奨励。

「留学生科」の設置（1935年）

この留学生と称された日系米国2世たちの学園内の存在と各クラスへ編入学はクラスの中に，日本語を母国語としない，発想の違う生徒と共に生活し，学ぶことを共有した。

以上のプログラムを学園教育と生活の中に織り込んだ。

また，一方，河井は女子が学問の学びにおいて，最高のものを与えようとした。決して，程度を下げようとしなかった。多くの教科書を男子と同じものを用い，更に，独特の参考書を用いた。行事が多い学園であったが，その為に勉強の授業時間を減らすことには，厳格で，許さなかった。その上，時間をかけてするのなら，誰でもうまく出来る，時間をかけないで，よくすることを，奨励した。

これも，当時，女子に要求されない事であった。世界観を正しくいただくためには，教育の程度をあげなければならない，と理解した。

e, まとめ

この期を概括すると，彼女の国際は神を中心として，全人類はみな兄弟姉妹であり，「愛して住むは我らの願い」の国際善意デーの歌として，全学園で歌ったように，キリスト教信仰とその世界の理想が，神の国の地上での実現への具体的姿にあった。そして，それを実現するために，国際政治と国際社会に関心をもつ女性を育てるために，出来るだけ世界の人々の日常に触れ，普通の人々がどのような，思想をもち，関心を持っているかを，刻々展開される情報の中から学びとらせようとさせた。世界におこりつつある状況を知ることから始められた。

人々の日常に焦点をあてることで，深い理解を求め，神という中心によっ

て、国のそれぞれの利益から超越して、人類の利益へと、常に目を向けさせた。それは、河井においては、日本の国是も、多様な世界の中の一つであり、そのみに固執することで、他者の利益を損失することは好ましいとおもわれなかった。その意味で、河井の価値は一国を超越したものであった。

これらの理解のためには、生徒たちが、直に外国の人々と接触することを学園としても、推進し、学生・生徒が自分の感性で外国の人々の感性を、個人的に知ることを、プログラム化した。これまで、学校教育で見られないような、自由な、独創的なアプローチをした。これらはすべて、恵泉女学園の特色として、定着した。

また女性が自ら判断をなし、感性を持つ人格として、自立するために、自治である信和会を発足させた。それは単なる自治ではなくその根底に信じて和する共存の共同体の精神があった。このことは、河井においては、国際を一人一人が自分の問題として、関わり、世界が独裁者によって、統制されないためには、必須の条件であった。すなわち、河井にとって、平和の国際の単位は一人一人の人間であり、女性であった。世間からは、無視される存在であった女性が、実に社会構成メンバーとして、自覚し、一人前に他者からそそのかされずに、行動できなければ、平和の国際社会を形成することは出来ないと考えられた。ここにおいて、いと小さき存在とみえるものの存在の意味を重く見る、河井の価値観がり、それを、教育の場で数多く具体的にプログラム化した。

3. 戦中後期—学校教育への国家規制期。(1940—1945年)

a, 社会背景

1939年11月に創立10周年を迎え、河井の国際的青年の自治的、自発的教育の体制がととのい、恵泉女学園は成長をたどり、物質的にけっして、ゆたかではなかったが、心豊かな、学園生活であった。

しかし、1940年は皇紀2600年と数え、ドイツ、イタリアとの3国同盟を結成、大政翼賛会発足、「聖戦」の意識づくり、隣組全戸加盟、の年であり、

それと同時に生活必需品が切符制となる²³⁾。

やがて、外国人教師、宣教師に帰国勧告が出され、学園の理解者であり、後援者で有り、友人として、むかえていた方々の帰国、留学生科の学生のあわただしい帰国、残留組の普通クラスへの編入、帰国宣教師団から、にわかには御殿場キャンプ場の譲渡購入、明治6年のキリシタン高札撤去以来の日本女子教育の支持者であり同労であった宣教師のあわただしい引揚げであった。

河井自身が日米キリスト者平和使節として派遣される。それによって、学園内はかえって、平和へ危機感と平和への使命観が起こされる。

これらの出来事は、社会が新聞やニュースでかたるよりも、はるかに現実として、学生生徒に、人間として、事の重大性と戦争の足音が、個人の生活を制限し悲惨にさせ、別離の悲しみを告げるものである事、覆い隠すことの出来ない厳正な事実であることを教育することになった。

敬愛してやまなかった、優しいキルバン先生が講堂の前に立って、愛してやまなかった、生涯の国であった、日本を不本意に去らせられる事実は、10代の生徒たちに義憤に似た不本意さをいたく感じさせるものとなった。どんなにミス・キルバンが、その講堂にひそんでいたであろう特高に攻撃されないように学園のために配慮の言葉で挨拶したとしても、あの優しい彼女の愛にあふれた思いは、そして、祈り続けていると言った、言葉は、生徒に深い共感と感動と国境を超える祈りの力を語ってあまりあった。その十数分を、生涯わすれることは出来ない。それは戦中に入っていく時期、たくまずして、国境を超える国際教育そのものであった。

上記は一例にすぎないが、この戦中後期にどのようにして、河井の不変の国際精神が現在したかは、あるいは、記録で表明しきれないものがある。ことに、後述する河井の恵泉誌の巻頭言が特高によって、押収、回収を命じられ、言論の自由が脅かされ、絶えず管轄下にあった事実を認識した上で資料を用いなければならない。

b, 1940年度最後の「国際」の時間

河井は中学1年の「国際」の時間を重視して、開校以来河井自身でその授業を持った。1940年、日本がアジア侵略の大義名分のため八宏一字のローガンのもとに、「皇紀2600年」として、祝賀と国民に一つの思想を強いた時、そのクラスでしたことは、イギリスやロシアや外国の一般の人々が、他人のことに心を用いて、奉仕をしたり、自分たちなりに献金をして、外国を配慮する身近な話だった。1年生もその国際の時間が楽しみであった。クリスマスには、手づくりのクリスマスカードをつくって、外国の学園の友人に送る、とか、中国の女子の学校と手紙を交換するために、クラスで手紙を書くことにした。その時、河井は生徒が粗雑なことをしないように、文章も、清書も丁寧な指導をして、相手に対する深い尊敬の思いをもたせた。それは、中国にたいして、尊敬の薄い時代に、河井は厳しい尊敬の念を彼の国の同年輩の人々に対して抱かせた。

それに先だった1937年7月、中国との戦争開始の週に河井は中国から帰路、車中で武装をした日本の兵隊たちが、入ってきて、一人旅をしている中国の20才の神学校入学する青年が一瞬蒼白になったのを見、その隣にわざわざ席を変えて座り、国はどうであれ、私たちは互いの為に祈っていると語った。その中年の洋装の女性の名を覚えていた、その青年は1985年始めて、中国のキリスト教代表として来日した、丁光訓主教その人となったのであった。丁主教から直接筆者はその話を聞かされて、河井の国境と時代をこえ、かつ、当時、名もなき一介の若者へ、誠意を尽くし、一度も河井からはこの話を聞かなかった、彼女らしい出会いを知る。河井が絶えず、語ったとおりに中国の人への近親感と尊敬を抱き続けていたことがわかる。

かつて中国の南京が「陥落」した、として、提灯行列で歓喜したそうした場合は恵泉女学園の生徒は学校として、参加したことはなかった。それは、率先してこのような行事に参加するのが、奨励された時代に、河井はその裏にある、中国の民の悲惨に心重かった。恵泉女学園の不参加は無言の抵抗の、意思表示であったと、今、明らかとなる。

一般がほこらかに祝うような紀元2600年の到来に対して、その1940年、

この年の到来を「だが此厳寒の暗夜に烈風凄そうは夢を破って思を目下の戦時苦境に我等を引入れるのである。戦地を偲び、銃後生活の圧迫を感じ……国家的にも、世界的にも、今後は如何になりゆくかしらと心の騒ぐを止むる事が出来ない。」²⁴⁾と時流と別の現実の戦争という事実から目を離さず、更に「一夜、余り窓うつ風の烈しさに起き出て屋外を眺めると、第一に眼に止まったのは空の星の美しきひかりである。地は寒風吹きすさんでいても空の静けさがかえって身に浸むのであり、地は闇に包まれつつあるゆえに、星は一層輝きを増して空を飾るが如くに見えた。戦時中のクリスマスも暗夜の星づく空の如くである。」²⁵⁾

人間の悲惨なる状態、困難、苦痛、悲愁、との表現のなかに河井の戦争への批判が見られる。「利権獲得主義者がいかに平和を切望したとてそれは来るものではない。己を捧げる人には招かずして平和が来るものである」と²⁶⁾。

この年、中国の視覚障害の幼児を「恵泉女学園の生徒達の信和会が今後彼女を養女として、その養育費用の責任をおうこととなった」「この将来ある少女を妹として、その養育に幾分なりとも御手伝が出来るとは即ち恵泉が^(ママ)日支親善の一端に直接与る事で、なんたる幸いであろう。思うになんでも建設は困難で時間がかかるが破壊は容易で手早に出来る。」²⁷⁾

「世界はもはや孤独や独善主義では居られないように善悪ともますます関係が親密になって来た。そこで、われわれは善い方面のつながりを広くつよくさせねばならない。この意味において、いと小さきわざでも全力を注いだ無私の愛の奉仕には必ず影響が自然ときたるものである。其波紋はどこまでに及ぶかといへば全世界以上天まで及ぶ」²⁸⁾これが、河井の信念であり、戦争という一般の人々にとって不可抗力の現状にささやかでも、破壊でもなく建設を試みようとする、その強靱な信念をみる。それは「神が大きな波紋を世界の極まで及ぼしてくださるであろう結果如何は神にまかせつつ新世界建設の御手伝を忍耐と忠実を以ってやってゆきたい」²⁹⁾という。

この新世界とは河井にとっては、神の国であった。そういう時であっても、些細な事であっても、積極的に実行にうつすことが、河井の国際でも

ある。

それは量ではかれない、価値を神におく。戦争で絶望的である事実を痛く感じつつも、出来ることをする。それも、年齢の若いということに関係なく、若い時にむしろ、責任をもって、その範囲で出来る事をするというのが、河井の特色であった。

その年のクリスマスも、同様に、戦時を感じ、「今年も世界動乱の中でいかで」と「悲しみの念に鎖されている矢先」ロンドンから空襲の地下室で嬰兒が生まれた写真に、「北斗星が雲にさえぎられたとて消えるものでもないのに、地上より雲を眺めて星なしと失望するのはなんたる愚かなことであろう。戦争の暗雲のため神の顕なるキリストが消ゆるものでない」³⁰⁾。河井はしきりに、雲の向こうには太陽が、あるいは雲に隠れていても月がある、という話をした、と人々の印象に残っている。

また、河井の短期の中国大陸訪問はその優れた文化への尊敬の言あり、「女子教育の良否、深厚の正邪が今後猶一層家庭、国家のみならず国際的に大影響を及ぼすは言をまたない。日支提携に先ずわれわれ両国の女子が如何に温き友誼を結び得べきか？ 此実際問題の解決、実行運動に恵泉も真剣に加わり、何をなすべきやとの宿題を以て」³¹⁾と記す。国際間の関係を自分たちの出来る範囲において、多少なりと何かを実行しようとする河井の思想が、ここにも現れている。

また、戦争が日本においては日常生活にさほど影響を示さなかった、日本と中国との戦争の時代にあっても、河井の戦争の悲惨への心痛は深かった事が、あらわれている。

c, 米国への日本キリスト教連盟よりの代表7名中唯1名の女子として派遣せられる。(1941年)

河井は「情勢の悪化するのみの米国に、いかにキリスト教の事のみとはいへ出足が鈍るのは致し方がない」³²⁾とことわった。また緊迫した米国へいくことはオランダの防波堤の破れ口に幼い手を当てて防ごうとした、子供にたとえて、「早く救援がこなければ手は凍えてしまう」³³⁾と自らの使命の

限界を知りつつ、「冷笑と誹謗とがむくいられても、もし神のみむねであれば」³⁴⁾と手帳に書き記している。そうした思いの上で、この事も、学園一同にとって、一つの最も、即事的教育であるとの認識をもった。河井は記している。「“主キリストにありて一也”の真意を新たに味はへばそうして次の時代を背負ふ若人に、己以外に世界のあることを知らしめ、愛は死よりも強きを悟らしめ」³⁵⁾とその意義をのべている。

河井は日本を多様性のなかの一とここでもはっきりと見ている。河井の国際観を示している。1941年3月、河井は渡米した。カリフォルニアのリヴァサイドで両国キリスト者代表の平和の話し合いと祈り会がもたれた。

また、何千人という聴衆にむかって、堂々と平和を語った河井が多くの人々から、わたしたちも悪かった、と涙ながらに手を握り合った経験を訪ねるところどころでした。

職員に当てた河井の手紙に「さて、今回の使命ははたせたか否かは神に御任せいたします。くるしみもありました。喜びと感謝のほうが幾倍でありますので、参って良かったと常に思ひます。大きな場所にての演説のほうが個人的の会合よりは寧ろやさしきものなりとの観は時々いたしました。米国のリーダースはなかなか深く考へています。日本も深く考へて国際的に目をむけなくてはなりません。益々学園の教育に此の方面をも振張せねばならぬことを教えられました。余り我らは教育でも社会関係でも、或る殻に立ち籠り広い高い見地を忘れると、次の国民にすまないことあります。ともかく広いとか狭いとかは神中心か、或は自己中心かによって定まるものであります。米国も此の自己中心をはなれなくてはデモクラシーがかえって国をわざわざいいたしませう。」³⁶⁾ (1941年6月21日記)

この中で、河井は益々学園の教育に此の国際方面を強調する決意を示している。さらに、広い高い見地とは、「神中心か自己中心か」にある。即ち河井の国際度の基準がここにあることは、どんなに、国や個人が不可抗力とみえる力に打ちのめされても、究極においては、神において超越することにあるところが、顕著な特色といえよう。

河井がアメリカから帰ったその夏、京都の教会で報告会が開かれた。満場の礼拝で彼女がかたろうとすると、1枚の紙が、壇上におかれた。私服がきているから注意を、というメモだった³⁷⁾。賀川豊彦が帰朝報告会で、警察に抑留されたばかりだった。京都の警察署は特高と深い関連で左翼、キリスト教、その他分担して調べも徹底していた³⁸⁾といわれる。河井は礼拝が終わるやすぐに、2人の私服が近寄って、いきなり、そのまま車で連行された。そして、夜半まで拘置された。河井は長時間の終わりにはその若い警官が親しみを感じるようになっていた³⁹⁾。

1941年11月29日ワシントンのスタンレイ・ジョーンズから電報がきた。「ワシントンの全教会が太平洋の平和解決の為に7日間の24時間祈禱をはじめ、日本でも同じ祈禱を」⁴⁰⁾そして、河井は数人の教師達と、ろうそくをともして、連日祈った⁴¹⁾。

にもかかわらず、戦争は始まった。

この世の大きな力を変えることは、出来ないかもしれない。しかし、たとえ、小さいと、弱いと、無力とみえることであっても、できる限りをする、こういう価値の見方が河井的なのである。その背景に、神の支配への信仰がある。河井の国際観は信仰の一形態でもある所以である。

d, 真珠湾の日、恵泉女学園の朝の礼拝は河井が壇上であって、愁いにひしがれた表情であった。そして、「悲しむべきことが起こった」と告げた。それが、町にあふれる戦勝の勇ましい歌と歓声とあまりに相違していたため、中学生でも、深い印象を受けた。戦争は悲しむべき現実だ、と。河井はけっして、曖昧でなかった。日本とかアメリカとか一国の国利のレベルでは語らなかった。

後に、この戦争中の事を彼女は戦争は反対だった人々も多くいたが、黙らされ、国交は断絶され悲惨のきわみであったが、「世界の兄弟性の進展に無益で有害なこと」⁴²⁾だったと批判している。

そのクリスマスの恵泉誌巻頭言「薔薇とクリスマス」に「幾百年か知らないが終には主により世界平和が来るとの約束を思い、今年もこの非常時に謹んで天使の歌を心より歌ほうではないか。」また、「某国の高位な老紳士に戦地より帰還した一人が戦場の凄惨な光景を物語ったところが、その老紳士は暫時頭をたれていたがにわかになんて立って、卓上の」バラの中に顔をうめた、「或意味においてクリスマスはバラの盛花ではなかろうか。すべての怖い、恐ろしい、恥しい場面や思い出を消すためにクリスマスに顔を埋めるがよい。」⁴³⁾この号は発売禁止、すべて、回収が、当局から命令された。

危険とそれに抗する勇気が河井の周辺にたえずあった。

e, 日本を愛し帰国を承諾しなかった、米英の宣教師は1所に収容されたが、老齢で自宅監禁となった方を、河井は同行者に迷惑がかかることを配慮して、一人で夕暮れの畑中道をたまたま手に入った貴重な食糧を持って、たずねた。ほとんど訪ねる友人も無くなった宣教師老夫妻とのこうした関係は河井にとっては当然のことであった。河井は日本の社会からの非難批判を意に介さなかった。

河井は毎日の礼拝でくり返し祈った。「日本が神の御前に正しい歩みをするように、日本の罪をゆるし、この国をまもり給え、為政者達によき知恵を与え、神の正義しき業が行われます様に——」⁴⁴⁾

礼拝の席の後ろには見慣れない私服の男性が座っている事も間々あった。

毎日の礼拝は厳守し通した。学園では当然であり、後に動員令が出て、工場に配属されても、工員が集まる始業時間より恵泉女学園の生徒は30分前に集まって、部屋を与えられないところでは、凍る屋外で、賛美を歌い、日課聖書を朗読し、奨励を聞き、祈って、始めた。しかし、当局から礼拝を止めるように呼出を受けた。河井はそれに対して、丁重に、しかし、はっ

きりと礼拝を止めるなら、学校を止めると答え、ついに礼拝をやり続けとおした。戦時下のキリスト教主義学校がさまざまな面で「自粛」をしたが⁴⁵⁾、恵泉女学園では、この面において生徒が気づくような変化はほとんど起らなかった。

英語の時間を減らすように勧告がなされたが、減らなかった。生徒は論じたが、結局これからも国際社会だという認識にたった。その上、かえって、他のミッションスクールを離職した、米国等生まれの2世教師を河井は受け入れたために、増加して、その為に戦中に英語は会話の時間も母国語の教師が教えた。また、自由思想のため閉校になった学校の生徒が多数編入受け入れた。

アメリカ生まれの二世の学生生徒は留学生部がなくなったため、一般の組に編入したため、各組数名づつの外国関係の生徒がいた。日々、戦争の悲しさを慰め難い実感とし、戦中の激しい時を共に過ごした。ハワイ生まれのハワイに両親兄弟姉妹と離ればなれになっているクラスメートと共に真珠湾攻撃のニュースは不安と涙で呆然とする友を慰めるすべを知らず、しかし、軽はずみに喜ぶ等は子供心でも出来ないことであった。共に生きるということは、国際平和が理論よりも、実感となった。

恵泉女学園も、慰問袋をつくり、決められた勤労働員で軍服のボタン付けや洗濯作業をしなければならなかった。日本キリスト教団が決定した、飛行機の為の募金にも参加した。学園が公共性をもった文部省の認可をうけている教育機関として、しなければならぬことは確かにあった。それを拒否して、非合法になること、すなわち、閉鎖を命じられることは、さげられた。しかし、一方で、教師の中に平和の思いから、参加を拒否した教師も、その意志を河井は本人の望むようにさせた。

恵泉女学園には御真影がなかった。又、教育勅語も、いわゆる下賜されるものはなかった。それゆえ、それをおさめる特別な社のような殿はなかつ

た。

こうした時に、生徒の記憶にのこっているのは、毎日の礼拝聖書日課にネブカドネツアルの話があり、捕囚の民への神の希望を苦悩の中に学ばせた河井の真意を今考える。捕囚の間にも、畑を耕し、結婚し、子を育て、すべきことをせよ、とのごとく、日常を重視した。

その次の年、1942年クリスマスの恵泉誌に「…神は人類の父、人間は兄弟姉妹であるとの意義が強く实际的に表はれなくてはならない。まだ何処にもその理想が完全に実現してはいないが、しかし人間は……愛に於いては平等で、其の点に於いては人種差別取扱いなどが影だになくなり、強者は弱者のために奉仕し、心の清い者が即ち小さき童子が大人を指導する世界が必ず到来するであろうとの約束がクリスマスである。」⁴⁶⁾

1943年羊年に年頭には贖罪愛の羊を語り、「学園には最初よりしていわゆる金主なる者はございません。キリスト教主義だとて外国より何の補助も受けた事が有りませんが、天の神がすべての恵みの源泉であります。……もし恵泉が精神的に低下して仕舞ましたらば物質的に成長は停止すると存じ、所信に向かって邁進することが、良き学園をなす道であり、従って、国家に尽くす義務であると存じます。此戦時下にあつて大なる希望を持ち次代の国民に全心全霊を注いでゆかせ給へと祈って一同が働いて居ります。」⁴⁷⁾

国際ということと言えない時代にあつて、これが限度だったと思われる。

f, 1944年太平洋戦争末期、河井は園芸科を旧制の専門学校に昇格することを考えた。文部省から認可のための実地調査の予定を報じている1945年1月のガリ版の恵泉誌に河井は「神は我らの隠家、永遠の住居などの聖句が胸に通ひ何卒出動の者も在学の者も力の限りを喜び勇んで日々の責任を

完ふし得るやうにと朝夕祈るを忘れない……学園のクリスマス献金が金壺千二百余円となり、例年通り諸所に寄付が出来たことである。」⁴⁸⁾空襲の中で日常を続けている。

1945年3月3日、園芸科は「キリスト教信仰によって教育を行う」との文字がはいった、認可を受けた。

g, まとめ

河井にとって、戦争は最も苦しい時であった。しかし、学園の教職員生徒をかかえ、前向きに前進するしかなかった。日々文字どおり祈りの日々、神にまかせるしかない日々、であったことが、よくわかる。

平和の時代になった時、なぜ、希望の無いところで、希望を、光を輝きを、生きることの中に見いだしながら生きたかと批判する事は、できよう。しかし、そこで、生きるしかなかった、河井は神の勝利を信じて、神の勝利を、勝ち得てあまりある事を説いた。

日常の祈りを、生活を捨てなかった。のみならず、このような激しい戦争にあっても、日常性ともいえる、学校を専門学校にする平時でも大事業をやった。

河井はかつて、母が召天した悲しみのどん底で、「こういう時は夢中で働くに限る」と博覧会の婦人のための休憩所をつくるために、募金活動に集中して、立派にたて、奉仕をした。それを連想させる。同じ思いであったろう。河井は一日たりとも、神の日々を無駄にしない。

ここにも、日常性と超越性をみる思いがする。

4. 結語

河井の国際性はその日常性と超越性を、たとえば、これを縦糸に、創造性と弾力性を横糸にしたところに、独特の国際性があるといえよう。

河井ほどあたらしいことをするのに、おそれず、いわば、開拓者魂に燃えていた女性は珍しい。ことに、伝統的、閉鎖的日本の1945年以前の軍国

一色の、統制的、封建的社会の中で、全く前人未踏の荒地を耕し、種をまくことをためらわなかった。その根本は、花を咲かせ、実を結ばしめるのは、神であるとの信仰があったからである。新しい事をする、とは、労作であるが、彼女はそれを一層楽しいことに受けとめ、ことに他者の為に尽くすことが、神の業に参加する喜びと見た。また、恵泉女学園を神が与える神の学園とうけとめ、そこに注がれるよきものはすべて、恵みの喜びと感じた。戦中という極限的日々でありながら、日常性を失わず、創造的、弾力的に困難をうけとめ、創造のよろこびに変えた。

こうして、見ると、河井の日常性の極みは神と共に歩む個の人格に昇華され、一人の人間のレベルになる時、それはすべての人間に通じる。その日常性がそのまま、国際性に通じる所以であり、河井の国際性はまことに一人一人の人間の肩にかかっている。それは、従来問題にされにくかった、一人一人の女性のかたにこそかかっているというはっきりした自覚にたっていた。

イエスがサマリヤの女に「水を飲ませてください」⁴⁹⁾と声をかけた日常性の中に、また、ギリシヤ人でシリア・フェニキアの女の娘をいやした⁵⁰⁾超越性に、河井の国際性の原点を見る。

四周がどんなに激動していても、河井の信念と生き方は変わりがなかった。羅針盤をつねに、神にあて、イエス・キリストに焦点を合わせて、いる限り、戦中といえども、国際性に変動はなかったのであった。

注

- 1) 河井道子 『私のランターン』(My Latern 邦訳) (以下ML邦) P. 266
- 2) 河井道子 *Japanese Women Speak* 1933
- 3) 河井道子 *My Latern* 1939
- 4) 河井道子 *Sliding Doors* 1951 (以下SD)
- 5) 恵泉誌 第1巻第1号 (以下誌1:1) 1932
- 6) 河井道 ML邦 P. 294
- 7) 前掲 誌1:1 1932
- 8) 一色義子 『愛の人河井道子先生』創元社 1953 (以下愛の人) P. 56

- 9) 前掲 ML 邦 P. 266
- 10) 前掲 ML 邦 P. 266
- 11) 前掲 ML 邦 P. 266
- 12) 前掲 ML 邦 P. 267
- 13) 前掲 ML 邦 P. 267
- 14) 前掲 ML 邦 P. 269
- 15) 前掲 ML 邦 P. 270
- 16) 前掲 ML 邦 P. 270
- 17) 前掲 ML 邦 P. 270
- 18) 前掲 ML 邦 P. 270
- 19) 前掲 ML 邦 P. 276
- 20) 『読める年表』自由国民社 1990 (以下年表)
- 21) 『恵泉女学園五十年の歩み』1979 (以下歩) P. 30
- 22) 前掲 歩 P. 51
- 23) 前掲 年表
- 24) 前掲 誌 7 : 78 1939
- 25~28) 前掲 誌 9 : 84 1940
- 29~31) 前掲 誌 9 : 89 1940
- 32, 34, 35) 前掲 誌 10 : 92 1941
- 33) 前掲 愛の人 P. 95
- 36) 前掲 誌 10 : 96 1941
- 37, 39) 前掲 SD P. 13—14 (筆者訳)
- 『キリストの証人たち・抵抗に生きる』「河井道子」の項 一色義子 日本基督教団出版局 1974
- 38, 45) 『特高資料による戦時下のキリスト教運動1』新教出版社 1972
- 40) 前掲 SD P. 16
- 41) 前掲 歩 P. 156
- 42) 前掲 SD P. 18 (筆者訳)
- 43) 前掲 誌 10 : 100 1941
- 44) 前掲 愛の人 P. 96
- 46) 前掲 誌 11 : 111
- 47) 前掲 誌 12 : 112
- 48) 前掲 誌 14 : 127

49) 聖書 ヨハネ福音書 4 : 7

50) 聖書 マルコ福音書 7 : 24—30

51) 前掲 歩 P. 40

文献

* 『河井道子文集』——恵泉女学園編集

* 一色義子『河井道子』教会新報社 信仰偉人伝44 1983